《研究ノート》

ロシヤの聖職者

佐々木　彰

ラモン・J・センデルの小説『鎮魂ミサ』（雑誌『世界』一九六四、六・七月号に訳載）は、近ごろ珍しく読みごたえのある重厚な作品であった。この小説の読後感は私の頭のなかで、前に見た外国映画『山猫』の印象と奇妙に交錯した。さらにまた、『禁じられた遊び』のいくつかの画面をありありと思い浮べた。というのは、この三つの作品は、扱われている時代もちがえば、物語の舞台もイスパニヤ、イタリヤ、フランスとちがっているが、しかしその背景にはいずれもカトリシズムがあるからである。そのさい感じたのは、ストーリイによりその現われかたは異なるものの、聖職者が民衆の生活と広く密接な接触面をもっていることである。聖職者を通して宗教が、民衆の精神形成や日々の生活に大きなかかわりをもっていることである。カトリック教をぬきにして、民衆の生活のいきいきとした描写ができないほど、宗教が民衆のなかに深く根を下ろしていることである。

ところで、小説『鎮魂ミサ』は、一九三一年のアルフォンソ十三世亡命事件に関連のある物語だが、老司祭モセン・ミリヤンの回想という形式で、イスパニヤの若き農夫パコの悲劇が描かれている。モセン・ミリヤンは自分の洗礼してやったパコを、パコが成長するにつれて両者の間に思想のへだたりができたとはいえ、愛していると言えるであろう。パコもまたモセン・ミリヤンには、少年時代の思い出をともなった親しい感情を抱いている。つまり二人の間には人間的な信頼感がある。国王亡命事件を背景とする民主主義の高揚を迎えて、パコもまた農村の民主化のために立ちあがる。だが、やがて情勢が変り、勢いを盛りかえした支配階級の手先である暴力団に追いつめられ、パコは窮地に陥る。そのとき、司祭は助命を条件にパコに降伏をすすめる。パコは司祭の助言に従う。しかし暴力団は約束を破りパコは射殺された。司祭は元来パコを救うために行動したのだが、結果においてははからずもパコを敵に売り渡すこととなったのである。村人はパコのことを、ロマンセのなかで歌う。それを聞くにつけても、モセン・ミリヤンの心の傷は痛まざるをえない。

たとえその意志がまったくなかったとはいえ、パコの信頼を裏切った老司祭モセン・ミリヤンの背信を、作者は口汚なく罵ることもできたであろう。しかしセンデルはその方法をとらない。最後まで、喜怒哀楽の感情をセーブした実に淡々たる筆致で、作者は語りつづける。そのためかえって、作者の訴えようとする思想の説得性が強まるのである。怒ることを知らないか

のようなこの作者は、温和なブルジョア・ヒューマニストであろうか。いや、そうではない。解説によれば、彼は一九三六—三八年共和政府軍の砲兵中佐であり、一九三八年よりメキシコに亡命の身であるとのことである。すなわち彼は革命家・作家なのである。しかもその作品に描かれている聖職者は、戯画化されてもいなければ、卑小化されてもいない。

では、いったい、ロシヤ文学ではどうだろうか。聖職者がこのように物語のなかで、真面目な、厳粛な役割を演じているであろうか。ロシヤの小説や劇に登場する聖職者は、日常生活において民衆と広い接触面をもつものとして姿をあらわすであろうか。彼らは民衆のモラルを高め、その内面的生活を豊かならしめる能力をそなえているだろうか。ユゴーの『レ・ミゼラブル』に出てくるミリエル僧正のごとき役割を、はたして彼らに期待できるか。これらの問に対する答はどうやら否定的であるように思われる。

たとえば、プーシキンの『ボリス・ゴドゥノフ』に出てくる総主教は愚鈍な人物である。もっとも、短篇小説『駅長』のなかで、聖書の放蕩息子の物語への辛辣なパロディを書いた詩人を、ここでひきあいに出すのは適当でないかもしれない。つぎにゴーゴリには『肖像画』という宗教くさい小説がある。この作品では画家という特定の職業を通して、一般に芸術が金儲けとは両立しないこと、金銭追求にはしることにより芸術家のモラルの低下の免れがたいことが示されている。そして作者は、芸術が宗教と結びつくことによってその堕落から救われることを説いている。小説では、画家が修道院に入り修行をつむことによって、破滅を免れることになっている。他面それは、芸術至上主義の否定にも通じる。作者の視点はモラルをともなわない美の追求の不毛を説くことにある。しかしながら、画家を実社会から切り離し、修道院に隠れ住ませることによって現実との対決をさけた作者の姿勢は、消極的のそしりを免れえないであろう。この作家の晩年における思想的転向のきざしを、われわれはこの『肖像画』に見ることができる。いずれにせよ、この作品のなかで画家・宗教家は、金の魔力に対して、なんら積極的な役割を果たしていない。彼は現実の問題の解決にまったく無力である。レスコーフの『かもじの美術家』にも僧侶が出てくる。暴虐な地主のもとから、愛しあっている二人の若い農奴が駈け落ちを企てる。すぐさま地主の追手がかかる。二人は寺に逃げこんで坊主にかくまってくれるように頼みこむ。坊主はかくまう代金として金貨六枚をまきあげておいて、やって来た地主の追手に二人を引き渡す。こうした恥知らずな役割が、この作品の聖職者に与えられているのである。この聖職者は、いかにも民衆と接触がある。しかし彼は民衆の魂を救うどころか、彼らを食いものにしている偽善者で、ペテン師で、いかさま坊主である。その反面、彼らは魯鈍でもある。

もちろん、ロシヤの小説にも立派な聖職者——名僧智識が出てこないわけではない。たとえばトルストイの『セルギイ神父』、ドストエフスキイが『カラマーゾフの兄弟』に登場させるゾシマ僧正などがそれである。カラマーゾフの末弟アリョー

シヤもまた、将来は申し分のない聖職者となるべき人物である。しかし彼らはいずれも修道院に身をおく世捨人であって、一般世人との交渉をほとんどもたないのである。S・モームが、「アリョーシャは、二人の兄ドミートリとイヴァンに比べて、従属的な役割をつとめているにすぎない。姿を見せたかと思うと、たちまち消えてなくなり、彼よりも重要な役を演じる人々に対して影響を与えることがほとんどないらしい（西川正身訳）。」と指摘しているのは正しい。なぜならアリョーシャは作者が作りあげようとした理想像で、作者の観念の所産だからである。この点ドストエフスキイの作中人物は、他の多くのロシヤ作家の主人公と異なっている。他の多くのロシヤ作家――リアリズムの作家たち――は現実の反映においてきわめて直接的である。同じことが『白痴』についても言える。ドストエフスキイはキリスト――ドン・キホーテ――「貧しき騎士」（プーシキンの詩）の延長線上に『白痴』ムイシュキン公爵を設定した。一八六〇年代の農奴制廃止後の崩れゆくロシヤ社会にあらわれた「キリスト」を待ちうけていたものは、悲劇的な結末であった。ムイシュキンもまた作者の観念の実験的所産であり、人物にはまったく肉体的な現実性がない。したがって、これらの主人公のなかに現実の反映を見ることはできない。それにもかかわらず、アリョーシャが修道院の人として設定されていることは、それ自体けっして無意味ではない。

神学校の生徒を主人公としたものに、チェーホフの『学生』がある。その役どころは多少狂言まわし的なところがなくもないが、しかしこの短篇はストーリイの構成上、どうしても彼の存在を必要とする。聖書の一節が話の中心にすえられているが、歌い上げられている思想はヒューマニズムの讃歌、人生の肯定である。しかし、ここにあらわされた宗教的感情は、おそらくギリシヤ正教会の説くところとは異質もしくは無縁のものであろう。

以上、思いつくままにいくつかの作品に触れてみたが、そこからわかったことはつぎの二点である。すなわち、立派な聖職者は修道院にいて俗世間にはいないことと、民衆と接触のある聖職者はきわめて下劣な人間として描かれている、ということである。下劣でないまでも、精神的な高尚さをなんらもたない、ムジーク同様の愛すべき僧侶には、チェーホフの作品でよく出っくわすところである。『谷間』に出てくる、イクラを四フント平らげた寺男などがそれである。

ところで十九世紀のロシヤ文学が、ロシヤの現実の再現の文学であるとすれば、ロシヤ聖職者のこのような登場は、逆にロシヤの現実を反映させたものにちがいない。それでは、いったい、何がロシヤの正教会の性格や聖職者のありようを規定したのか。

それは、まず第一に、ロシヤによるキリスト教の導入の歴史的状況によって規定された。マサリックの『ロシヤ思想史』は、ロシヤ初期キリスト教の特徴について、つぎのようにのべている。

「ロシヤ人がキリスト教を精神的に理解するということは不

可能であった。というのは、彼らはそれに必要な教養を欠いていたからである。ビザンチンやローマでもキリスト教に帰依したものは、教養のある、哲学的に訓練されたひとびとであったし、また後年キリスト教化された西欧諸国民はローマ文化にあずかっていたのである。だが、ロシヤ人にはなんの心構えもなかった。したがってビザンチンの神学や神学的宗教哲学は、ロシヤ人になんの役に立とうか。それゆえロシヤ人はビザチンから、主として教会の儀式と戒律とを吸収したのである。このようにしてキリスト者となったものの道徳は、主として外面的なものに狭隘化されたし、外から仕込むという形で普及され、強められた。独立した司法権をもって科することのできた罰のほうが、「言葉」よりも影響するところが大きかった。なによりも強力であったのは、禁欲主義と修道院生活をともなった修道僧の道徳の働きであった。修道僧は生ける模範、時がたつにつれて大へん効果があることのわかった模範であった。

ビザンチン人は愛の福音をもたらしたが、人間性というふうな余分なものはなにひとつ持込まなかった（佐々木俊次・行田良雄訳）。」こうした初期の特徴があとあとまでもつづき、独自の性格が形成される一因となったものであろう。

第二、ロシアでは教会が政治権力の隷属下にあって自主性をもたなかったことである。その結果正教会は皇帝の権力にただ奉仕するのみであり、農奴制度支持の恥ずべき共犯者として民衆に背を向けた。

第三に、ロシヤは西ヨーロッパとちがい、宗教改革（それは社会の発展にともなう宗教の体質改善であり、中世から近代への脱皮であった）を経なかったことである。

第四に、ロシヤ人は本来的に無神論的な民族であること。ロシヤの僧侶階級は庶民の軽蔑の対象であった。これについてはベリンスキイのつぎのような意見がある。

「あなたは、わが国の僧侶階級がロシヤの社会から、またロシヤの民衆から全く軽蔑されていることを本当に知っていられないのか？　ロシヤの民衆は誰について恥しらずな話をしていますか？　僧侶、僧侶の妻、僧侶の娘、僧侶の使用人たちについてです。ロシヤの民衆は誰のことを、馬鹿な種族と呼び、ふとい腹をした種馬と呼んでいますか？　僧侶たちをです……ロシヤでは、僧侶はすべてのロシヤ人にとって大喰い、けちんぼ、おべっか、恥しらずを代表するものではありませんか？　まるでこれらの事実をすべてあなたは知っていられないように見えるではないか？　奇体な話だ！　あなたによれば、ロシヤ人は世界中でいちばん宗教的な民族だということになっている、嘘っぱちだ！　宗教的であることの基礎は、神をうやまい、神をとうとび、神をおそれることです。ところが、ロシヤ人は身体を掻きながら神の名をとなえるのだ！　彼は聖像について語るのだ、用のあるときは——祈るが、用のないときは——壺のふたにする、といって。

もっとよく眼をとめて御覧なさい、そうしたらあなたも、それが本質においてふかく無神論者的な民族であることを見

られるでしょう。彼のなかにはまだ多くの迷信がありますが、宗教的であることの痕跡はないのです。迷信は文明の進歩とともになくなってゆくが、宗教性はしばしば民族とともに生きのこるのである。その生きた例はフランスで、そこでは現在でも啓蒙された、教養のあるひとびとのあいだに多くのカトリック信者があり、またそこではキリストの信仰をすてたひとびとの多くが依然としてある種の神に味方しています。ロシヤ民族はそうではない、神秘的な興奮は彼の本性にはありません。彼はそうなるにはあまりにも多く常識をそなえ、知性における明らかさ、確かさをもちすぎています。そしてこのことのなかに、おそらく未来における彼の歴史的運命の偉大さがひそんでいるのである。彼においては宗教性は僧侶階級にすらも根を張らなかったのです。けだし、非常に冷たい禁欲者的な自覚によって卓れている数人のとくべつな、例外的なひとびとがあったからといって、それは何ものをも証明しないのです。わが僧侶階級の大多数は、ふとった腹とスコラ的なペダンチズムとはげしい無知とのみによって際だっていた。それを宗教的偏執とファナチズムとで非難するのは罪悪であり、むしろ信仰ということに典型的に無関心であることで称讃してもいいくらいなのです。宗教性はわが国では諸々の分離派においてのみあらわれたが、それらはその気風において人民大衆とは非常に対立的であり、かつ数的にも大衆を前にしては取るに足らぬものでありました（横田瑞穂訳）。」

ベリンスキイがこの『ゴーゴリへの手紙』（一八四七）のなかで、ロシヤ人の無神論的性格のなかに、ロシヤ民族の未来における歴史的運命の偉大さがひそんでいることを指摘しているのはさすがである。正教会はつねに笞の支柱であり、専制主義の下僕であったとするベリンスキイは、ゴーゴリがキリストの名のもとに忍従を説くことに激しく抗議する。キリストはひとびとに自由と平等と博愛の教えを説いた最初のひとである。彼は身をもって教えに殉じ、自己の教えの真実を証した。そのようなキリストと正教の教会との間にはなんらの共通点もない、と彼は言う。ベリンスキイによれば、嘲笑を武器として、ヨーロッパで狂信主義と無知の焚火とをうち消したヴォルテールのほうが、ロシヤのすべての僧侶、僧正、大司教、総主教たちよりもキリストの子たるにふさわしいのである。ベリンスキイのこのような見解は、ロシヤ人の国民性は宗教的であるとする俗説と真向うから対立するものである。

もちろん、ロシヤ人のなかから多数の宗教哲学者・思想家の名前をあげることができる。年代にかかわりなく便宜その名をあげると、V・ソロヴィヨフ、ホミヤコフ、トルベツコイ、ブルガコフ、ベルジャーエフ、ロスキイなどである。しかし彼らの大多数はあまりにも保守的で、思弁的であり、さし迫った現実の問題の処理にはほとんど無力であった。また彼らと民衆との間の橋渡しをする聖職者を欠いていたことも否定できまい。

おそらく右のような理由から、ロシヤでは、西ヨーロッパのように、キリスト教が民衆の間に広く浸透してその精神的バッ

ク・ボーンとなるようなことがおこらなかったものと思われる。ギリシャ正教の東方的・中世的性格は、宗教とヒューマニズムとの結びつきを、頑強に拒否したのである。

さて、ロシヤの聖職者の役割について考えるきっかけを与えたのが、小説『鎮魂ミサ』であることはさきにのべた。その作者センデルの亡命しているメキシコで、去る七月十三日、タマヨ、リベラ、オロスコとならんで現代メキシコの四大美術家の一人とされているシケイロスが、三年一カ月ぶりに釈放された。シケイロスは出獄にさいしてこう語っている。「獄中でわたしは、キリストを描いた。なぜか。キリストを信ずる者だけがキリストをかくものだ。」「今の瞬間から、わたしは芸術家としての、また一市民としての全活動を開始する。」注釈によれば市民としての活動とはカストロ支持のことだという。つまりシケイロスにあっては、芸術と、カトリシズムと、革命とが結びついているのである。

（一橋大学非常勤講師　東京工業大助教授）